
謎解きはリボーンの後で・・・

時雨

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

謎解きはリボーンの後で・・・

【Zコード】

Z3742Y

【作者名】

時雨

【あらすじ】

オリ主である高嶺 朱雀は目を覚ますと一つの部屋にいた。
扉から出てきた執事、黒野から今までの事を説明され親の計らいによつて並盛高校に行く羽目になる。

何かそこで？グローブやボンゴレリングに炎灯しちゃつたり、原作とは一味違う技習得しちゃつたり、んで何故か難事件に挑んじゃつたり、様々な出来事が起こっちゃいます。
楽しんで見てください。

田を覚ますと・・・(前書き)

初の一次創作なのでどうなるか分かりませんがどうぞご覧ください！

田を覚ますと・・・

田を覚ますといつもの朝だつた。
眩しい朝日が窓を突き抜け部屋に入つてくる。小鳥たちのさえずり
が聞こえてくる。
いつも通りの朝だつた。だが一つだけ違つといろがある。

「・・・どこだこい？」

俺、高嶺 朱雀たかみねすざくはとある部屋のベッドにいた。
しかし、その部屋はただの部屋ではない。貴族様が暮らしてそうな
あの無駄に広い部屋だ。

力チャ・・・。

すると、部屋の扉が開いた。

「あつ。お氣づきになられましたか」

そこには黒のダークスース姿の男がいた。

「後氣分はどうですか？」

「あの。一つ聞いても良いですか？」

「はい。何でしょ？」

「あんた誰？」

すると男は、

「おつと、申し遅れました。私ここで執事をやらせていただいております黒野という者です。以後お見知り置きを」

「執事？」

「はい。朱雀様の旦那様から雇われました」

「父さんから！」

俺は目を丸くしながら言った。

「は、はい。作用でござります。覚えていらっしゃいませんか？朱雀様。昨日の事を」

「昨日の事?」

よく思ひ返してみた。すると一つの答えにたどり着いた。

「あー」まさかかとは思うが昨日、突然意識を失つたのつて・・・」

「はい。旦那様が朱雀様の首に一撃を入れて、氣を失わせたためでござります」

「ああ・・・。そ、う」

その時、俺は内心思つた・・・。

『……』と、心の中で呟んだ。

そんな事を気にせず黒野は、

「ところで朱雀様。入学式の準備は整つておりますか?」

入学式？

「はい。明日は並盛高校の入学式で『Jedi』ます」

「されや那様の話をしてされ、おおきな」

「い、いや。まだだけ」

「作用でござりますか。それではござ用意いたしましょう」

黒野は手に持っていたリモコンを操作した。すると、壁からそれはながーいクローゼットが出てきた。

「えーと・・・」
「されば?」

「いろいろの中から、セレクト、制服を選んでいただきます」

「選ぶつて・・・これ何種類あるんだよ・・・100はあるんじゃないか?」

「正確には112種類でござります」

112!

再び俺は田を丸くした。

「何でここまで作ったんだか・・・いつそ私服校の方が良かつたんじやねーか?」

「それは困惑でござります」

「しゃーない。ひとつと選んでおまうか!」

とは言ったものの、普通に一時間もかかってしまった。やはつこ今まで多いと時間はかかるわな・・・。結局、俺が選んだのは上は黒のブレザー、下は白と黒のチョックのズボンだ。

「とてもお似合いですよ

「そりやビーも」

「では、次はカバンなのですが

「まだ選ぶのか?」

「はい。これの他にも、靴、部屋、運動着、etc...」

「あー分かった分かった。とにかくおまうじまおつ」

そして早速、バックを選び始めた。

バックは先ほどとは違い、三つに決められていたのですぐ決まった。俺は手下型のカバンを選んだ。

その後も色々ことは進み、すべてが終わったのはもう夕方の頃だつ

た。

「やつと終わったー」

「お疲れさまです」

黒野は「一レールを机の上に置いた。

「やつこえば、ここから並盛高校は近いのか?」

「はい。歩いて15分の所で」

「チャリで10分といつたところか・・・」

「自転車で行くおつもつですか?」

「当たり前だらかな近いなんらわざわざ車で行く必要無いだらう」「いえ、やつむつ事ではなくて無いので」

「えー、そつなのか・・・しょうがない。明日は歩きで行つてその後で買に行くが」

そうしてかれこれ一時間が経ち、時刻は10時半。

「もう10時半か・・・やつむつ寝るか」

「やつして俺は慌ただしく一日を終えた・・・。

田を覚ますと・・・（後書き）

いや～何か見る限りほとんどオーリジナルになってしましました。

なんか・・・ねえ・・・(前書き)

第2話

いや～今回は前回よりも長くなつてしましました。頑張つて読んでください。

あと少しグダグダです。

なんか・・・ねえ・・・

朝、俺はいつも通り目が覚めた。

ふとベッドの横を見ると荷物の入ったスーツケースがあった。おそらく黒野が準備したものだらう。まったく、本当に準備の良い奴だ。必要な物は全部揃っている。

そう思いながら俺は昨日選んだ制服を身にまとい朝食を取り、出掛けようとした。その時、

「お待ちかね！」
朱雀様

黒野が何かを持ってきた。

「どうした黒野？」

「これをお渡しするのを忘れておりました」

すると持っていた箱を開けた。そこには「ひのこの」のロングパンツと寝中時計があつた。

「これは？」

「ひのこのは並盛高校から贈られてきたものでござります。なにも個人認識のようなものだとのことです」

「ふーん。並盛高校って随分と変わってんだな。

「分かった。ありがとうございます」

俺はリングをチョークに通し首にかけ、懐中時計はポケットに入れ
た。

「それじゃあ、行つてきまーす」

「行つてらつしゃいませ朱雀様」

＼・＼・＼・＼・＼

今、俺は一年生の教室にいる。だが・・・これは・・・ねえ・・・。

『後ろからクラス全員の視線を感じるんだが・・・』

分かりやすく言つてしまえば、工の第1話でゆう一的氣分である。

ただ一つ違つとすれば、クラス全員が女子ではないことだ。ちゃんと男子もいる。

だが・・・その男子でさえも俺の事を凝視している。

怖いよ・・・怖いよパート・シユ・・・。

「えー、皆さんこんにちは。それでは、我が校の説明をいたします。本校は入学式でも説明したように、自警団を育成するために様々な分野に取り組んでおります。」

「ああ。そういうえばそんな説明してたな。校長から。確か名前は沢田・・・綱吉だったかな。帰つたら黒野に聞いてみるか。こうしてまあ説明は終わつたんだが・・・未だに視線を感じる。すると一人の男子が近づいてきた。

「よつー俺、山本 啓信けいしんで言つんだ。よろしくな!」

その男子は他とは違い、どこか抜けていいるいわば天然な奴である。

「あ、ああ。よろしく」

俺は山本と握手をしたついでに、

「なあ。何で俺みんなに見られてるんだ？」

「何でつて、そりやあお前が大空の守護者だからだよ」

「大空の守護者？」

「そつ。大空の守護者はこの七部属性の中でも数少ない人間にしかないからなあ。だからお前新入生の言葉言わされたんだよ。ちなみに俺は雨の守護者だ」

ああ。そういうばあつたな・・・あん時は驚いたよだつていきなり新入生の言葉の書かれた紙を渡されんだもん。

「なあ。その七部属性には何があるんだ？」

「ああ。大空の七部属性には嵐、雨、晴、雲、雷、霧、そして大空の七つがある」

「へー」

「そしてそれぞれを色で表すと、嵐はレッド、雨はブルー、晴はイエロー、雲はヴァイオレット、雷はグリーン、霧はインディゴと言ふことになる。みんなのリングを見てみる」

俺はクラスのみんなの指に目をやつた。そこには、様々な色の付いたリングがはめられていた。

そこで気づいたのは、

「みんなほんとんび『ザイ』ンが違つんだな」

「まあな。リングの『ザイレン』によつてそいつが『Jリ』に所属するかがほとんど分からぬ」

そこで山本は、

「そうだ。朱雀のリングも見せてくれよ」

「え？ ああ。 いいけど」

俺は首に下けていたリンクを山本に手渡した。

「おつーやっぱ朱雀もアーマルリング持つてんのか」

「アニメマルリング？」

「ああ。アーマルリングって言うのはそれに炎を灯せば実体化して一緒に戦ってくれるとても便利なやつだ。ちなみに朱雀のは・・・」

「ふーん。でも、もう一つね？」

「ああ。これは・・・」

すると山本の見る目が変わった。

「これは・・・ボンゴレリングだ・・・」

「ボンゴレ・・・リング？」

「ああ。Jの学校の中では三つのアランクオーバーのリングを持つフアミリーがある。シモンフアミニー、ミルフィオーレフアミニー、そして、ボンゴレフアミニー」

「その中のボンゴレフアミニーのリングがこれって訳か・・・」

「ああ。でもまあ良かったよ。お前もボンゴレで」

「・・・え？」

俺は頭の中に?のマークが浮かんだ。

「まさかかとは思うが・・・山本、お前・・・」

「ああ。俺もアランクオーバーでボンゴレフアミニーだ」

やつぱりか・・・。ん? いやい? とは・・・。

「なあ。俺達の他にも後5人いるみたいとか? ボンゴレのアランクオーバーが」

「まあやつらになるとなるな」

「いつたい誰だ?」

「まあ一人はめぼしあついてるんだがな」

「え? 誰?」

「俺の友人で嵐のAランクオーバーがいるんだ」「そつか・・・んじやあ明日会つてみるか」

「ああ。んじやあ今日はこれで」

「おひ。また明日」

そして今日は帰宅した。

「・・・」帰宅後、俺は黒野に校長先生について聞いてみた。

「なあ。黒野」

「何でいじこまじょう?」

「お前、うひの校長先生について何か知つてるか?」

「校長先生と言いますと、名前は?」

「確か沢田 綱吉だつたかな」

すると黒野の手が止まつた。

「ん? どうかしたか?」

「朱雀様、それは確かでござりますか?」

「あ、ああ。そのはずだけど・・・誰なんだ?」

「の方はボンゴレ^{デーチモ}。ボンゴレファミリー十代目でござります」

「え・・・ウソだろ・・・」

「もひ帰つていらしたのか・・・」

「なあ。何でお前校長先生の事知つてるんだ?」
「私は・・・」

その後、黒野の言つたことは、

「私はボンゴレ十代目の守護者だからで、」^{ヤエコ}「まわ

「なん・・・だつて・・・」

「守護者といつても正確には少し違いますが・・・」

「どうゆひ」とだ?」

「私の属性は確かに大空の七部属性なのでしが、私は他の部隊に所属していました」

「他の部隊?」

「はい。私が所属しているのは・・・」

その後、俺は黒野の言つたことに耳を疑つた。

「私が所属しているのは・・・」^{ヤエコ}「C E D E E F で、」^{ヤエコ}「まわ

「C E D E E F ってボンゴレとは独立した諜報組織でもあり門外顧問でもある組織だよな」

「作用でござります。良く、存じで」

「まあ友人から少し聞いたんだ」

「もしや、山本様では？」

「良く知りてんな」

「はい。彼はボンコレ十代目、雨の守護者山本 武様の息子にあたります」

「マジかよ・・・」

その後、俺は黒野の話を聞いた。話によれば、残りの守護者はあの学園にいるらしいのだが、それが誰かとゆづまでは知らないとのこだ。

まあその事に關してはいいや。明日からはちゃんと自転車で行けるから今日よりはゆっくりと行けるからぐっすり寝るとしてよ。こうして俺は眠りについた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「集まり始めたな・・・」

「ああ・・・」

「ボンコレとシモンのよつな・・・」

校長室には一人の男がいた。

「オレ達の意志を継ぐ眞の後継者が・・・」

その校長室には柔らかい月明かりが差し込んでいた・・・。

なんか・・・ねえ・・・（後書き）

まさかの黒野がC E D E F とゆうオチ・・・。

次回も頑張ります！

（ ）

ルームメイトはお嬢様？（前書き）

第3話

やつとヒロインの恋場です。

ルームメイトはお嬢様？

翌日、俺は自転車で学校に行き、山本にある人物を紹介された。そ
う。昨日言っていた嵐のAランクオーバーの友人である。だが・・・
。

「こいつが俺の友人、佐久間 さくましようた 翔太だ」

「誰が友人だ、ダアホ！」

その佐久間 翔太とゆう人物は見る限り少し不良っぽい感じの人物
なのだが、どうも不良のように見えない。

え？ どうゆう意味だつて？ ん～・・・ 分かりやすく言えば、なんと
ゆうか見た目は怖いけど心は優しいってゆうあれだよ。ほらよくい
るじやん。見た目は不良だけど見かけによらず横断歩道でおばあち
ゃんを助けてたりしている人。あんな感じ。

「で、こいつが・・・」

「ああ。大空のランクーバーの高嶺 朱雀だ」

「ふーん・・・」

すると佐久間は俺の顔をまじまじと見た。
すると佐久間は、

「やっぱお前、綱吉さんに似てるわ

「え？ 綱吉さん？？」

「ああ」

佐久間はあつさりと答えた。

「どうが？」

「まあ、なんとかわからんねえけど、とにかく似てる」

「は、せぬ。」

こうして新たな仲間が増えた。

寮の部屋割りが発表された。

えーと、俺は027号室か・・・」「

部屋割りの横に寮への地図があるのだが、迷う所ではなかつた。なぜなら・・・。

『あそこって学生寮だったのか』

そこに俺と黒野かいるあの屋敷たったのた

『なるほど。どうりで無駄に広いわけだ……』

その後、俺は迷う事なく寮（屋敷）に着いた。
入ったところに山本と翔太がいた。

「お前らも寮生活なのか？」

「ああ。それで俺と翔太は同じ310号室になつたんだ」

「ふーん。俺とは少し遠いな」

「まあ、学校でも会えるし暇なとき遊びに行くよ」

「ああ。じゃあまたな」

山本達に別れを告げ、俺も自分の部屋に向かった。

「～～～～～～～～俺がちょうど部屋に着く手前で廊下の曲がり角から声が聞こえた。

「いいから、私の執事になりなさい！」

「それは出来ません！」

「どうしてよ！」

「私は」の寮の執事。あなた様だけの執事になる訳にはいきません

「そんなのどうでもいいでしょーーいいから私の執事になりなさい！」

なるほど、黒野と誰かが言い争っているのか・・・

「おーおー、どうしたんだよーー一人で言い争つて」

「ああ。朱雀様。この方が・・・」

「私の執事になつてくれないのー！」

「で、この人は？」

「池沢 夏希様でござります。大企業、池沢グループの社長の一人

娘でござります

へー。まあ、服装からしていかにもお嬢様って感じはするけどな。

「だから私の執事になりなさいー。」

「ですからそれは・・・」

「かしこまりました」

「え?」

「わたくし
私があなたの執事となりましょ。お嬢様」

「朱雀様!」

「・・・あなたに出来るの?」

夏希が疑いの目で見てきた。

「「安心くださー。私、人のお世話は得意中の得意ですから

「や、そう。ならあなたに任せるわ。えーっと・・・」

「高嶺 朱雀ともうします。以後お見知りおきを

こつして俺と夏希お嬢様の生活が始まった・・・。

ルームメイトはお嬢様？（後書き）

いや～。今回は朱雀が執事になるとゆうつオチ・・・。
次回も頑張ります！

え～っと・・・どちら様で・・・? (前書き)

第4話

今回はリボーンに出でくる“あの人”が登場します！

えへっと・・・えひひり様で・・・?

翌朝、夏希は目が覚めるとそこにはエプロン姿の朱雀がいた。

「おはようひびきますお嬢様。昨日は良く眠れましたか?」

「ええ。おかげでまことに・・・といひで朱雀」

「はい。何でしょう?」

「あなた何してるの?」

「見ての通り朝食を作っているのです」

朱雀は平然と言つた。

「今ちよひびき出来上がりつました」

テーブルに出されたのはトースト、スクランブルエッグ、サラダ、コーヒーだった。

「そう、ではいただくわ」

そして、今日も一日が始まつた・・・。

＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼俺は一足早く準備が出来たのでお嬢様を待つことにした。

「じめんね待たせて」

「いえ、ではまじりましょひ

俺は自転車の後ろにお嬢様を乗せ、学校に向かった。その途中、

「ねえ朱雀、今日の朝食とてもおいしかったわ
「お気に召していただいて良かったです」

「あなたどこでならったの？」

「フフフ・・・それは秘密ですよ」

「えー。教えてよ」

こんな感じで歩いていると目の前に一人の男が現れた。

「おい、お前らー！」

「いいから、教えてよ」

「では、今度簡単なものを教えましょう」

「やった！」

一人はその男を素通りしていった。

「だから、ちょっと待てよ！」

男は少しキレ気味で一人を呼び止めた。

そして、俺は振り返り、

「何ですか？とゆうか・・・どちら様ですか？」

「俺は並盛高校2年剣道部主将、持田だ！」

そこまでは聞いてねーよと言いたい気持ちを抑え再び持田先輩の話を聞いた。

「高嶺 朱雀だつたな。お前に決闘を申し込むー。」

「は、はあ」

「放課後、剣道場にこいー逃げるんじゃないぞー！」

と、言って持田先輩は去っていった。

はあー。どうしよう。しゃあない、行くか・・・。

「・・・・・・・・・・・・放課後、俺は剣道場にいた。だが何か様子がおかしい・・・。なぜならそこには剣道部員だけではなく一般生徒もいるからだ。

「なあ山本。持田先輩ってそんなに強いのか?」

「まあ去年、市大会で優勝したくらいだからな。」

「ふーん・・・・」

話していると、持田先輩が現れた。その姿は剣道の胴着と片手に竹刀とゆう格好だった。

「待たせたな」

「どうやら決闘の内容は剣道勝負のようですね」

「ああ。一本を取った方が勝ちとなる。そして勝つた方は賞品として、池沢 夏希を手に入れる事が出来るー!」

周りからは黄色い歓声（？）が聞こえてきた。
俺はため息をつき、

「まあ何でも良いんですけど、人を賞品扱いするのはどうかと思いま
すが・・・とくにお嬢様となれば・・・ただじやおきませんよ」

「始めるか？」
「うん！」

「その前に僕の胴着は？」

そのんなのお構い無しに持田先輩は突っ込んで来た。

「無し……か……まいづか」

俺は竹刀を握り歩き出した。

「何もしてこないとは、アガの極みだな！」

失礼ながら持田先輩、それはあなたの方ですよ」

すると俺は持田先輩の一撃を必要最低限の動きでかわし、

一瞬の事だつた。

周りの生徒達は何か起つたのか分からずにして、しかし、山本と佐久間は、

「勝負あつたな」

「だな」

すると、持田先輩の面が真つ二つに割れた。

「な！」

「一本・・・取らせていただきました」

「しょ、勝者、高嶺 朱雀！」

すると周りから一気に歓声が沸き起こつた。

ふう・・・終わつたか・・・

俺は竹刀を軽く振り下ろし、剣道場をあとにした。・・・。

～～～～～～～～～～～～ 時間は過ぎて今は夕食の時間。夏希は朱雀の作った料理を食べていた。

「そういえば朱雀」

「何でじゅう？」

「剣道場の時思つたんだけど、あなた剣道したことあったの？」

いえお嬢様。一度もありません。

「ウソ！ じゃあ何であんな動きが出来るの？」

「分かりませんが身体が勝手に・・・」

「へー。じゃあ『お嬢様を物扱いするのはただじやねえかよ』
は？」

俺はあーと言ふ、

「失礼ながらお嬢様、我々執事の描寫はなんだと想いますか？」

「え？ それはこんな風に食事を作つたり掃除をしたたり

「それももちろん大事なことです」やつこお。しかし最も大切なのは
主であるお嬢様を守ることです」やつこお

「え？」

「お嬢様はこれから生涯誰かに支えられて生きていこうとして
お忘れ無きよつ」

夏希はその言葉の後、窓から見える円を眺めた。

えへっと・・・、あなた様で・・・? (後書き)

持田先輩・・・、「愁傷様です・・・。

次回は謎解きします!

殺しのワケンせいかがですか？（一）（前書き）

第5話

今回は投稿が遅いてしましました。

そして今回は血口最長のページ数です（。。。。）

皆さん、頑張って読んでください。。。()

殺しのワインはいかがですか？（一）

翌日、俺はクラスで話題になっていた。

そりやそうだ。市大会の優勝者を一撃でしとめたんだもん。

「ねえねえ、朱雀君つて剣道やつてたの？」

「私も教えてほしいなあ」

こんな感じでずっと質問攻めにあつていて。そんなどうして

「相変わらず人気だな」

「山本。俺の顔が嬉しいように見えるか？」

「いや、どっちかつて、疲れてるみたいに見える」

「あたりめーだ！」ここまで質問攻めにあつて平気な奴を俺は見て見てーよ！」

「いるぜ、一人」

「佐久間だろ」

俺は分かつていた。佐久間はクラスの中でも人気者だ。

「アイツはすげーよ。勉強もスポーツも何もかもが出来る

「ついでにピアノ、料理もお手のものだ」

「まあ、唯一苦手なのは、女子だけだな」

そんな感じで話していると、先生が入ってきた。ちなみに一時間目は数学だ。

「ほー、席に着けー。つーても今日は自習なんだけどな」

クラスからは喜びの声があがつた。確かに、自習つても先生から課題を出されたのは一度もないからな。

「それじゃあ、席に戻るわ」

「ああ」

そして、一日が始まつた・・・。

授業が終わり、今は帰り道。お嬢様と一緒に帰つてゐると、

隣の屋敷から悲鳴が聞こえた。

「なんだ！」

俺はすぐに悲鳴の聞こえた屋敷の一階に向かつた。

「どうしました！何があつたんですか？」

「あつ・・・ああ・・・」

その女性は田の前を指差した。そこにま、

「な！・・・」

一人の男が椅子に座つて死んでいた。机の上にはワインのボトルと小さな小瓶、そして床にはワインがこぼれたグラスがあつた。

「早く警察と救急車を！」

「は、はい！」

お嬢様がそう叫ぶと女性はすぐに警察を呼んだ。

「朱雀、あなたはすぐに帰りなさい！」

「お嬢様？」

「私がお嬢様つてばれちゃいけない理由があるの！早く！」

「か、かしこまりました」

俺はすぐに屋敷から出た。それから10分後、すぐに警察が到着した。

「…………」「しかし驚きました。お嬢様が刑事だったなんて」

「まあね・・・つてあなた何で知つてるの！」

おっと、口を滑らせてしまつた。今度から気をつけないと。

「実を語りつと今日、お嬢様を見守りさせていただきました」

「そんなことしたら見つかるわよー。」

「申し訳ありません。今度から気をつけます」

夏希はため息をついた。

「はあー。やつぱり自殺なのかなー」

「と、言ごますと」

「あなたも見たかもしれないけど、あの小さな小瓶は青酸カリだつたわ。おそらく自殺するために使つたのかもね。朱雀、あなた何かわかる?」
俺は少し黙り込んで、

「い、いえ私にまさつぱり……」

『そつよね。刑事が一般人に質問してもね……』

夏希がそつ思つていると、

「しかし、お嬢様は今日何人から証言を聞いているはずです。その内容を詳しく話していただければ私なりの考えが述べられるはずです」

すると夏希は少し考へた後、

「分かつたわ。話してあげる」

「ありがたき幸せ」

「…」… まず死亡した男は、若林 辰夫^{たつお} 62歳。第一発見者はあの家の家政婦よ。なかなか起きないから部屋に呼びにいたら寝室での状態だったてわけ。

で、ここで私の上司、風祭警部が、

「見る、池沢君。若林 辰夫は寝る前にワインを飲んでいたのだ」

て、誰でもわかるようなことを言つたんだけど、

「あのお嬢様、この風祭警部とゆう人はアホでらつしゃいますか？」

「まあ、そう考えて良いわ。」

で、その後若林の人間が集められたんだけど、そこで辰夫の弟、若林 輝男^{てるお}は、

「刑事さん、ひょつとして兄は自殺したのではありませんか？」

「いえ、まだ自殺と決まったわけではありません」

で、さらに長男の若林 圭一^{けいいち}は、

「自殺じゃないというのなら、刑事さんはこれは殺人だといふんですか」

「べつに殺人であるとはいっておりません。まだ殺人の可能性も否定できないといつているだけでして」

そして今度は圭一の妻である春絵が、

「まあ、刑事さん、なんて物騒な」とをいつんです。この家にお義父を憎むものなど一人もいません」

次に次男の若林 修一は続けて、

「刑事さん、親父が死んだのは自殺だよ。みんな知っている」とだ。そうだる」

「ど、いこますと」

「昨日、家族会議で親父は家政婦である藤代 雅美まさみとの再婚を考えていたのです」

「それで、眞さんとの反応は」

「もちろん、反対ですよ。父は騙されているんです、あの女に。きっと財産田端たばに違いありません」

すると輝男は胸ポケットからマッチを取り出し、パイプに火を付けた。

「それで結婚を反対された辰夫さんの様子は

「そりやあ、すげに落胆した顔で部屋を出て行きましたよ」

「しかし、僕らは父の為に善かれと思つて言つたんですから」

今度は圭一が煙草を一本くわえて、百円ライターで火を点けようとしたんだけど、どうやらガス欠みたいで、壁際にいた修一に、

「おい、お前ジッポー持つてたよな。貸してくれ」

やれやれと修一は言いながら、ポケットからジッポーのオイルライターを取り出し、圭一の煙草に火を点けてやると、ついでに自分の煙草にも火を点けた。

「どうやら若林家は喫煙率が高い家族のようですね」

「ええ。私もたまらず窓を全開にしたわ」

そして次の瞬間、扉から家政婦の藤代 雅美が入ってきて、

「曰那様は自殺などではありません！曰那様は何者かに殺されたのです！」

すると春絵は、

「あなた！でしゃばるのも、いい加減にしなさい！お義父様は自殺なさったのよ。それもあなたのせいだね！」

すると春絵は続けて、

「ええ。判つたわ。あなたはお義父様の遺産狙いでこの家に来て遺産をかすめ取るつもりしているのでしょ？！」

「いえ！私はそんな・・・」

「黙りなさい！」の恩知らずの雌豚め！」

すると、風祭警部は時計を見て、

「おつと、もうこんな時間だ」

時計を見ると、時刻は1時45分、昼ドラはおしまいだと言いたいのだろう。もう少し見たかたが仕方がない。

「で、朱雀。あなたこの時どこにいたの？」

「はい。辰夫氏の部屋の棚においてあつた見事な蔵書ぞうしょに目を奪われておりました」

「ちよつと一ちゃんと仕事しなさい。」

「なんと、私が愛読してやまない『ハーポット』の最新版さいしょがあつたのでござります。」

「無視すんな！てゆうか人んちのものを勝手に取つてくるな！」

「もちろん返しますとも。読み終えたらですかつてあつ。」

朱雀の手から本が取り上げられ、

「今すぐ返す！」

「・・・はい」

その後も捜査が続いた。で、場所は変わり辰夫さんが一昨日行ったスナックに聞きに行つたんだけど、

「ええ。 来ましたよ」

「どんな様子でした?」

「うーん・・・なんか陽気な感じだつたわ」

「はあ・・・」

「あつーでもカラオケで十八番を歌おつとしたり急に泣き出して」

「急に・・・ですか・・・」

その後、私達はスナックの手伝いをしたの。

「あのー何を作ってるんですか?」

「ん? ああ。 最近、経費削減の為にからしをチュークから練りからしに変えたのよ。 でも大変なのよね~」

「は、はあ・・・」

その後、向かいに住んでいる少年の話によると、

「君が雄太君だね。 話があると聞いてきたんだけど」

「うふ。 あのね、おじいちゃん先生の部屋から明かりが見えたんだ」

「それは何時くらいの事かな?」

「真夜中だよ。 午前2時くらい」

少年は指を2本立てて答えた。

「雷の音で田が覚めてトイレに行こうとしたらおじいちゃん先生の部屋から小さな明かりがゆらゆら一つ動いてたんだ」「少年よそればどんな明かりだった？マッチか？蠅燭か？」
「そこまでは見えなかつたよ」

まあ、この少年の証言は事件にあまり役立たなかつたわ。

「……」「びつ、朱雀。やはり若林辰夫は自殺つてことで問題ないでしょ」

しかし、俺は険しい顔をしていた。

「いいえ……。それは大問題でござります。お嬢様」

「え？」

「お嬢様、これは殺人でござります」

「え！」

「失礼ながらお嬢様、お嬢様はどのあたりに毒があつたと思いまし
たか？」

「えつと……。グラスに塗られていたとかは」
俺は首を横に振り、

「いいえ、こちらを」「覗く、ださい。これは磨いたグラスでございま
す。このとき指でふれた場合」「そして触れてみると、指紋がくつきりとついた。

「そこまでは見えなかつたよ」

「あー。」

「「」のよつこ、何らかのものが触れたときに必ず何らかの痕跡は残るはずなのです。しかし、それがなかつた。つまり、考えられる事は一つ。ボトルの中に毒を入れたのでござります」

「どうゆうつう」と。」

「「」を「」覽くだせ。」

俺は黒野に一本のワインボトルを取り出させた。

「「」れは？」

「イー三ー二ーの一九九五円ものでござります」

「ホントだ。値札が貼つてある」

夏希はボトルをジーッと見た。

「ねえ、朱雀。これ、どうから見ても毒を入れるといふなんてどうにも無いわよ」

俺は「あー・・・」と言ひ、その後黒野と顔を見合せ、せ、

「あの・・・失礼ながらお嬢様」

俺は顔をズイッと近づけると、

「お嬢様の目は節穴でござりますか？」

・・・・・ ハア？

夏希の持っていたコップに亀裂が入った。

「あの・・・お怒りのようでしたらお詫びを・・・」

「謝りますむなうこんな態度しないわよー！」

夏希は朱雀と黒野に怒鳴りつけた。

「それじゃあ聞くけど、あなたこの事件の真相がわかると言うの？」

「いきなり話が変わりましたね・・・。まあ、この事件はそれほど難しいものではございませんが、しかし・・・」

「何よ

「今ここで犯人を言つてもお嬢様には理解いただけないかと・・・」

「」

「」

夏希は一瞬、拳を振り上げそうになつたが必死にその手を降ろし、

「朱雀、私にも分かるように説明して」

その顔はいかにも屈辱に溢れていた。

「・・・かししまりました。お嬢様」

すると料理を出しながら、

「しかし、まだ夕食の続モドリガニマス」

田の前に料理を出すと、

「謎解モハトライナーの後にいたしましょ」

殺しのワインはいかがですか？（一）（後書き）

最後まで読んでくれた方お疲れ様でした。

次も頑張ります。o(^ - ^)o

殺しのワインはいかがですか？（2）（前書き）

第6話

今回グダグダです。

殺しのワインはいかがですか？（2）

夕食は終わり俺、黒野、お嬢様は大広間にいた。

「では話の続きをいたします。まず、犯人はどうやってワインボトルのラベルをはがさずに青酸カリを入れたのか。それは簡単でござります」

俺はもう一度ボトルの口を見せた。

「よーく覗ください。ここに小さな穴が一つ空いてるのが見えますでしょつか？」

「え！」

夏希はもう一度ボトルの口を見た。確かにラベルの頭に小さな穴が一つ空いているのが見える。

「これは？」

「恐らくワインの熟成を促すための空気穴でございましょう。ワインボトルを見慣れていないお嬢様が分からぬのも無理はありません」

「ふん…どうせ私の目は節穴ですよー。」

「どうやら夏希はまだあの舌葉を引きずっているらしい。」

「で、その穴から注射針なんかで毒を入れたってことね」

「さすがはお嬢様、ご理解がお早い。おそらく、辰夫氏が外出している間に部屋へ侵入し、毒入りワインボトルとメッセージカードらしきものを置いていったのでござります」

「メッセージカード?」

「これに関しては後ほど説明させていただきます」

そして俺は続けて、

「まあ、お嬢様は辰夫氏が自殺したとお考への、様子。しかし私はそうは思こません」

「どうして? だって辰夫さんは涙を流すほど思い惱んでいたのよ」「それは勘違いでござります。スナックのママはからしを練りからしに変えたと言つていました。そこに涙の原因があつたのです」

「え?」

俺は一つの目を持つてきた。

「こちらに市販のチョーブのからしと練りからしを」と様子しました。
ご賞味ください

夏希はまず、チョーブのからしをスプーンに取り食べ、苦い顔をしながらも練りからしを食べた。すると、

「…」

「はー。練りたてのからしは涙がちょちょぎれるほど辛いものなのでござります」

「先に言つてよ」

夏希は涙田で言つた。

「つまり、辰夫氏の涙の原因は精神的苦痛ではなく、人間の反射運動によるものだと思われます」

「なるほどね~」

「そして次に注目すべき点は雄太少年の証言にあります。少年は辰夫氏の部屋から小さな明かりが見えたと言つっていました」

「でもあの証言はあまり役立たないわ」

「いいえ、お嬢様。これは重要な証言でござります。まず、私が辰夫氏の部屋にいたとき入り口の脇の棚に懐中電灯が置いてありました。なのになぜ、火を灯したのでしょうか?」

「えっと・・・。停電だったから?」

「確かにそれもございます。しかし、若林家人間はあそこに懐中電灯があつたことを誰もが知っているはずです。つまり、部屋にいたのは懐中電灯が無くても困らなかつた人物に絞られます」

「そつか。それじゃあ、犯人は手元にライターやマッチを持っていたあの喫煙者達に絞られる」

「作用でござります。しかし、マッチの明かりでは作業には不十分でござります。作業中、何本もマッチを擦らなくてはなりません」

「てことはマッチを使つていた輝男は犯人ではないわね」

「はい。さうに圭一の妻、春絵も犯人ではございません」

「どうして？」

「彼女は喫煙者ではないからです。あの時圭一はライターのガスが切れたとき、隣に座っていた春絵ではなく、修一から借りた。すなわち、春絵は火を点ける物がなかつたとゆうことになります。そしてさらに普通の100円ライターではボタンをずっと押し続けなければ火は消えてしまいます」

「そこは、圭一も除外されて、犯人は修一のことね！」

お嬢様は自信ありげに話したが俺は、

「まあ、半分当たつていて、半分間違つてているといつて良いでしょう」

「え? どうゆうひと?」

「ここで先ほど話したメッセージカードについて話しましょう。恐らく犯人は辰夫氏に毒入りワインを確實に飲ませるためにメッセージカードを使ったと思われます」

「え?」

「お嬢様、昨日はどのような天気だったかご存じでしたか?」

「え? と? 確か雷と雨が降っていたわ。でもそれが何か?」

「雄太少年の証言によると、辰夫氏はいつも窓を開けていました。

そして、藤代 雅美さんの証言によると寝る前に本を読んでいたと言つていました。しかし、あの時机の上には本など一冊もありませんでした」「

「確かに無かつたわ」

「そして、私は本棚を見て、一つ疑問に思つたことがありました」

「疑問に思つたこと?」

夏希は首をかしげた。

「はい。それは一冊だけ逆さまだったことです。10冊や15冊ならまだしも、一冊だけ逆さまなのは少し違和感がござります」

「確かに。でもどうして?」

「犯人が暗闇のなか作業していくうつかり間違えたのでございました。恐らくその中に・・・」

「メッシュカードがあるってわけね。でも一つ分からるのは動機よ」

「遺産争いでございました。恐らく辰夫氏は藤代 雅美さんとの結婚を押し切るつもりだった。このままでは遺産が減ると考えた犯人は辰夫氏を殺害した」

「お金のために大切な家族を殺す?私には想像もつかないわ」

俺は眉間にシワを寄せた。

「お嬢様にはご理解出来ないかもしれません。しかし、人は数千万・・・いえ、わずか数百、数十万でも殺意を抱くものなのでございま

す。お嬢様は生涯お金に苦労する事はないかも知れません。しかし・

「俺はお嬢様の目を見て、
「お金とこれらのはそれほど悪いしき物なのだと叫んで」とをお忘れ
無やうう」と

夏希はしばらく黙っていた。そして、

「若林家に行くわよ朱雀」

俺は口元に笑みを浮かべ、

かしにまりました。お嬢様

一
は
じ

扇からは藤代
雅美が出てきた

お邪魔するわよ

—え?
「

失礼します」

「え？ え？」

俺とお嬢様は真っ直ぐ辰夫氏の部屋に向かつた。

「ちよつと、何なんですかあなたたち…」

若林の人達も集まつてきた。

俺は本棚にある逆さまの本を見つけ出した。

『これだ』

その本ねページをバラバラとめくつていいくと、封筒のような物が挟まつていた。そこには藤代 雅美以外の家族のメッセージが書かれたメッセージカードだった。

「これに書かれたことせどりも本心ではござりません」

「どうゆうこと…」

「家族全員が共犯者とゆうことです。家族で相談し、辰夫氏を殺害したのでしょうか」

「どうして…どうしてですか…」

雅美さんは叫んだ。

「うむやーーお前が俺達の金を…・・・

「いいえ、それは違います。辰夫氏は藤代 雅美さんを新たな家族として加えたかっただけです」

「なに?」

「あひりやーーよこまく」

俺はワインが並んでいる棚を指差した。

「あのワインは圭一さん、輝男さん、修一さん、春絵さんの生まれた年のワインでございます。そして、この鍵の番号は109。亡くなつた奥様の誕生日でございます」

そのとき家族の全員がハツとした。

「やはり辰夫氏は亡くなつた奥様のことを忘れずに覚えていたのでございます。彼はこの中に雅美さんという新たな家族を入れたかつた。ただ、それだけだったのです」

その後、警察が来て四人を連れていった。

「分かつてたの？家族が共犯者だつて」

「はい。家族の証言は辰夫氏は落胆した顔で出て行つたと言つていました。しかし、スナックのママは辰夫氏は陽気だつたと言つていました。つまり、家族全員が口裏をあわせていたということ。本当は結婚に賛成していたのでしょつ」

夏希は複雑な顔をしながら、

「そんな矢先に家族によつて殺される。辰夫さんどんな気分だつたか」

俺達は黙りながら寮に戻つていった・・・。

殺しのワインないかがですか？（2）（後書き）

今回はあまり良い出来ではあつませんでした。
次回頑張ります。(^-^)。

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？（前書き）

第7話

今回は短めにしました。

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？

5月

春が少し終わりに近づき、桜が葉桜に変わる頃。教室ではあること
が話し合われていた。

「そんじゃあ、玉入れの選手が決まって次は騎馬戦の大将なんだが。
。。。誰がやる？」

そう、話し合っていたのは一週間後に開催される体育祭のことだ。
俺は綱引き、棒倒し、リレーにでることになっている。
そして今は、体育祭の田玉である騎馬戦の話し合いをしていて、誰
が大将をやるのかを話し合っている。

「で、事前に候補のアンケートをやつたんだが、候補になつたのは
朱雀、お前だ」

「えー俺！ なんで！」

「そりゃあ、この前の持田先輩との対決を見れば・・・なあ

なあじやねえよーなあじや！

「普通の騎馬戦ならまだしも去年の体育祭の騎馬戦。ビデオで見た
けど、ありやあ戦争だぞー！ 戦争！」

「え？ それが騎馬戦じゃないのか？」

「おい実行委員。あんたビデオ見てたのか？ あんた見てないからそん

なセリフをサクッと言えるんだよー

「で、どうするんだ?」

うう・・・みんなの目がこの上ないほど輝いている。「いけ!朱雀!」とか、「お前はヒーローだ!」とか、「もつと熱くなれよ!」とかいう気持ちが痛いほど伝わってくる。

『ここは・・・やるしかないのか?どうする・・・どうあるアーフル

そして迷った末、

「・・・分かったよ。やつてやる」

その瞬間、クラス全員の歓声が湧いた。

「あー。喜んでこるとこ悪いんだが、俺の騎馬は誰がやるんだ?」

その瞬間全員が石のように固まつた。
てか、それ頭に入れてなかつたの?みんな?
そんな中一人が手を挙げた。

「んじゃ あ俺がやるよ

「ー山本!」

「こんうちこはやんねーとな。で、後は誰がやる?」

そしてそれから10分後、ようやく騎馬が決まった。

「よしー!体育祭まであと一週間。張り切つて!」
「ゼー!」

。 。 。 。 。 。 。 そしてその夜 。 。 。 。

「そういえばお嬢様は体育祭には出ないのでですか？」

「出るけど、それがどうしたの？」

「いえ、私とお嬢様は別のクラス。出るとなれば戦う種目があるかもしれませんね」

「そつか。で、朱雀。あなたは何に出るの？」

「話したい気持ちはあります、しかし手の内を明かさない方が良いと思いますので、お聞きいたしません」

「そう。それじゃあ一週間後が楽しみね！」

「そうですね」

「そんじや朱雀。かけ声頼む」

「え！俺！」

「あたりめーじやん！お前、大将なんだから」

「そつか。
んじやあ

俺は一息入れて、

「さて、いよいよこれから体育祭に乗り込むわけだが、これだけは忘れんな。・・・何が起ころうと、楽しんでこーゼ！」

俺は大きく息を吸つて、

「いくぞ！」

「――――――オオオオオオオオオオオオオオ――――――」

そして運命の体育祭が始まった・・・。

体育祭の醍醐味って騎馬戦なのかな？（後書き）

戦争みたいな騎馬戦ってどんな感じでしょうねwww.
想像しただけで恐ろしい。

捕らわれた親友（前書き）

第8話

またまた長くなつて、最多ページ数を更新しました（・・・・・）

捕られた親友

体育祭も始まり、今は種目も終わり次の種目の準備をしていく。

「まず、一つ目は快勝だな」

「ああ。結構楽に勝てたな」

ちなみに第一種目は玉入れで山本の活躍により快勝した。

「それでも山本には救わせたよ」

「何言つてんだよ。お前だつてバンバン入れてたじやないか

「お前程じやねーよ。だがしかし、佐久間のクラスとE組はヤバかつたな

「ああ。ありやあ強敵だ」

E組というのはあまり詳しいことは知らないが、スポーツ推薦で入ってきた奴が偶然固まつたクラスである。

しかもそのクラスにもAランクオーバーの守護者がいるらしく。

「なあ山本」

「E組のAランクオーバーの奴のことだ」

つたく。こいつは読心術でも取得してんのか？

「ああ。知つてんのか？」

「いや。名前くらじしか聞いてない」

「名前は？」

「上茂 涼介属性は分からぬけどな」

「そつか・・・」

すると、アナウンスの声が聞こえた。

『それでは次の種目、100メートル走に出場する選手は準備してください』

「おっ！確かにこの種目は佐久間が出るんだっけ？」

「まあ結果は分かつてるけどな」

そこで入場門に行つてみると、やはり佐久間がいた。

「おーい佐久間ー」

「なんだお前か」

「なんだって何だよ。応援しに来たのに」

「いらぬーよ。んなもの」

「そー言つなつて。頑張れよ」「ああ。一位になつてくる

そつ言いながら佐久間は会場に向かつた。

「…………」

「どうした？朱雀」

「ん？ああ、ちょっと懐かしいなつて。中学のころが

「中学のころ？」

「ああ。アイツのこことこんな感じで見送つたな～って」

「へー。お前、友人いたんだ」

「悪かつたないないように見えて」

「ハハッ。わりーわりー『冗談だつて』

「つたぐ・・・」

俺は空を仰ぎながらあの口を懐かしんでいた・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・おーい。孝平ー」

「ん？」

そこで振り向いたのは男子生徒。如月 孝平^{あづまひで}は朱雀を見つけ、

「おー朱雀。お前もこの種田に出んのか？」

「いや、俺は出ねーからお前の応援」

「そーか。つつても応援はいらねーよ」

「んな」と言つなつて。ヒョウわけで頑張れよ」

「ああ。 一泣くなつて帰つてくる好」

卷之三

孝平は朱雀とハイタツチを交わし、入場していくた・・・。

当を食べていこう。

しておいた。

「つってもほんとんど差は無いけどな」

「まだ逆転可能の範囲だ」

「次なんだつけ？」

俺はパンフレットに目を通した。

「次は・・・フォークダンスだな」

「フォークダンス！？これまた面倒なヤツが来たな

「まあまあ、そつ connaît わざにやればすむ話だ」

佐久間はため息をつきながら会場に行つた。

「さて、俺達も行くか

「そうだな」

俺は重い腰を上げた。すると携帯が鳴つた。

「ああ、悪い山本。先に行つてくれ」

「オッケー」

俺は携帯を耳に当てた。

「もしもし」

「高峰 朱雀か？」

その声は明らかに人の声ではなかつた。変声機で声を変えていふとしか思えない。

「誰だお前」

「フフフ・・・。私はエーテ。クロケツサファミリーの者だ」

「いつたい何の用だ？」

「お前のリングをいただきたい」

「ボンゴレリングのことか」

「作用」

「・・・断る」

「ならば仕方がない。無理矢理でも奪いに行くとじょひ

「何?」

すると一人の男子生徒が叫んだ。

「なっ!なんだあれ!」

振り向いた視線の先には、何かこっちに向かってくる物体が見えた。
それは車でもバイクでもないものだった。

「あれは・・・ジエット機!?」

そのジエット機から降りてきたのは三人の女達だった。恐らく真ん
中にいるのがエリで両端の女どもが部下だらう。

「お前がエリか」

「そうだ。そして「コイツらが私の仲間、EOとN.Wだ

「これは本名ではなくコードネームだな・・・。
これじゃあどこの誰だか・・・。

「もう一度言う。ボンゴレリングをいただきに来た。さあ、リング
を渡せ!」

すると、観衆の中から、
「何がなんだか知らねーけど」

「このリングは渡すわけにはいかねーなあ」

「山本！佐久間！」

「ほう。他にもリング所持者がいたか」

「とゆうわけで、派手な登場の後すまないが帰つてくんねーか」

「体育祭の続きがあるからな」

するとエーテは、

「やうか・・・。お前コイツがどうなつてもこ ciòうだな

「どうゆう意味だ？」

「これを見ろ」

エーテは校舎にあるものを映し出した。

『→』・・・コイツは・・・』

「孝平！」

「そつ、貴様の友人如月 孝平だ。コイツには時限爆弾をセットしてある。あと30分もすればドカンセ」

「そんな・・・」

「『コイツを救いたければ、リングを渡せ！』

「ぐつ・・・卑怯な・・・」

「そのとき、俺は迷っていた。

『クソッジービツする・・・渡さなければ孝平は・・・だが渡したとしても殺す可能性が・・・』

すると、モニターから、
「す・・・やべく・・・」

！　！　！

その声の主は孝平だった。

「孝平・・・」

「チツ、起きちゃったか」

「ダメ・・・だ・・・絶対に・・・その・・・リングを・・・渡しては・・・ならない

「だがそれではお前が・・・」

「朱雀・・・お前が・・・ファミリーを・・・・・・守れ・・・・そ
の・・・ボンゴレ・・・・・・リングで・・・・・・

「孝平……」

「俺の……」とは……気にはすんな……そのコングさえ……守れれば……それでいい」

「ふん。急々（いまいま）しい。親友を殺してほしくなければリンクを渡せ……」

俺は少し黙った後、

「……山本、佐久間。頼みがある」

「何だ？」

「孝平を探し出して時限爆弾を止めてくれ」

「朱雀……やめろ……」

「悪い孝平……お前の言つこと……聞けねーわ。だってよ、目の前で親友が殺されるの黙つて見過ぎるわけにはいかねーんだ。もし、そんな事したら……俺は一生後悔する。だから俺は……」

俺はエリを指差し、

「コイツをブツ倒して、お前を救い出す……！」

山本は笑みを浮かべ、

「まつ、お前じいな

「まつたくだ」

一人は納得したように言った。

「頼んだぞ二人とも」

「ああ」

「りょーかい」

二人は校門へと去つていった。
それを見送つた俺は、

「んじゃあ先生みんなを校庭から避難させてください」

「わ・・・分かつた」

先生も動き出し、生徒を校舎に避難させ、一部が雷の炎で結界を張つた。

「朱雀君。本当に大丈夫なんだな」

「大丈夫ですよ。綱吉さん。もしもの時だけお願ひします」

「・・・分かつた。だが、もしもの時は加勢するからな」

そういうて綱吉さんは戻ろうとした、

「あつそうだ懐中時計、上手く使えよ」

そういうて戻つていった。

「何を話したか知らないが、どんなにあがいても私達には勝てない

ぞ

「そんなの闘つてみなきやわかんねーぜ」

「朱雀・・・びひして・・・」まで・・・」

「孝平・・・一つ言わせてくれ。俺は親友の為ならなんだつできると思つてた。けど、こんな頼みを聞くくらいなら、俺はお前となんか友達になつてねーよ。だから・・・俺は絶対、お前を救つてみせるーそのためにも俺はコイツに勝ちたいんだ」

すると、俺のポケットから光を放つた。

「！」・・・「これはーあの時貰つた懐中時計！」

「ぐつ・・・なんだー!?」

結界の内側で綱吉は笑みを浮かべていた。

「そひ、それがお前の武器だ。」からびひするかはお前の答え次第だ

するとその光はさらりと強くなり、

『くつ・・・ダメだ。田を開けられな・・・』

「・・・・・・・・・田を開けるとそこは青空が広がつていた。

「！」・・・は・・・

「待つていたぞ」

！！！

振り返るとそこには歴代のボンゴレボス達がいた。そこにはボンゴレの創設者ボンゴレエ世もいた。

「何これ・・・夢？幻覚？」

『E - l a n o s t r a o r a i n c i s a s u l l - a n e l l o (リングに刻まれし我らの時間)』

「刻まれし・・・時間？」

「お前は」の力を受け継ぐ覚悟はあるか

「え・・・」

「お前は」の力をどう使いたい

「どうして・・・それはもううん・・・」

俺は心の底から思つて『』と口にした。

「みんなを守るために使いたい。大切な人や仲間、友達を守るために」

「その仲間のためにすべてを賭けられるか」

「え・・・」

「すべてを投げ出してまで助け出す覚悟が・・・」

俺は少し黙つた後、

・・・
はい」

あらわし

「良い顔だ。その覚悟しかと受け取つた。」の力で栄えるも滅びる
も好きにせよ、ボンゴレ×エ世」
「ウンディ チェースモ

! ! !

「お前を待つていた・・・さあ、行け！」

の頃校舎内では、

おがんれ
矢首がおにぎれるとしが

それを見ながら夏希は心配をへにしていた。

朱雀

その頃 I.T.、E.Q.、N.W. はまだ警戒している様子だった。しかし、そろそろしびれを切らした様子である。光に向けて銃口を向けよいとした、その時

「待て？」

すると、その中から
ITは光の中から微かだが何かが見える。

「昔、親父にこんな事を言われた。『やりたいことをやれー・そりす
ればいつか自分のやるべきことと合はわそう世界の声が聞こえる』つ
て。今がそなのかもな」

俺は口元に笑みを浮かべた後、

「さあ、派手に行こーか！一緒にこの世界を変えよーぜー！」

一気に光は強風ともに弾け、辺りに強い風が吹き荒れた。

「自分の答えを出したか・・・。やはり、アイツの武器は俺達と同じ・・・」

そこには額に炎を灯し手の甲にはボンゴコレの紋章を宿したグローブ
をはめた朱雀がいた。

「グローブ使いだ！」

俺は拳を握り直し、

「さあ、始めよつかー！」

捕らわれた親友（後書き）

いやー。迷った末、やつぱしぷナビジョットと同じグローブ使いになつてしましました。

今度から色々な工夫を凝らして頑張ります。(^-^)o

天空鷹（ファルコティコーリ）（前書き）

第9話

更新が少し遅れました。すみません（ーー）

久しぶりの戦闘描写です！』覗く下さい！

天空魔（ファルコティイチエーリ）

「さあ、始めようつか」

俺はアーマルリングに炎を灯した。

いくそ 1- サス

そこに現れたのは、大空の炎をまとった一羽の鷹だった。

やはり『朱雀』なだけに鳥だつたか・・・

ツカはそう思しながら、結界の中から見ていた。

「クソッ！何処にいるんだ！」

「早く見つけねーと時間が…」

二人は今、とある工場の中にいた。しかし、まだ孝平を見つけられずについた。

「おーい。孝平ー！」

「 いたら返事をしろー！」

すると奥の方から、

「誰・・・だ・・・」

「あつちだ！」

そこは椅子に鎖で縛られた孝平がいた。お腹には時限爆弾が巻かれている。

「お前らは・・・確かに・・・朱雀の・・・」

「あまりしじめべるな。今助けてやる」

しかし、ここで佐久間か、あるせの、に、

卷之三

「パスワードだ・・・」

そつそこには一台のノートパソコンがあり、画面には四桁のパスワードがあった。

「残り時間は！」

あと20分だ！」

「お前が何をやるか……だな」

一人は暗号解読に取りかかつた……。

IT達との戦闘が始まつてすでに10分が経過していた。

るのモーターを通して伝わっていた。

『クソッ・・・4桁のパスワードって全部数字って書つてばいいじゃないか』
『うはバカじやねえし、どうする・・・』

「これほど朱雀が手こずっている理由は奴ら戦い方にあった。
三人なだけあって連携が良く、うかつに突っ込めば確実にやられる。

「それにしても、アイツらの銃はいつ弾切れになるんだ・・・」

そう、普通の銃ならば一丁の弾数は12～13発程度、なのにアイ
ツらは12発おろか、30は撃つているように見える。見た目は普
通の銃なのに・・・。マガジンを入れ替えた仕草も見当たらない。

『クソッ・・・うなつていやがる!』

そう思つていると、IT達は容赦なく撃つてきた。俺は炎でシール
ドをつくり防御した。

その時あることに気づいた。

「これは・・・」

そこで俺はある一つの仮説が浮かんだ。

『・・・賭けてみるか』

俺はマイクで綱吉さんを呼んだ。

『綱吉さん。一つ頼んでもいいですか?』

「何だ?」

「それは・・・」

俺は内容をすべて話した。

「分かつた。やつてみよう」

お願いします

銃撃が止むと同時に俺は突っ込んだ。IT達も怯むことなく撃ち続
けた。俺は炎のシールドを広げながら接近した。

「かみ、
ファースト
零地点突破初代エディション！」

すると、IT達の持つていた銃が全て氷付けにされた。

やつぱりな。あの銃弾は全部、死ぬ気の炎で出来てたんだ」

「……どこで気づいた？」

「さっきガードしてた時、妙な事に普通の銃弾なら炎シールドによつて溶かされて溶けた跡が少しでも残るはずだつた。しかし、それがなかつた。つまり、死ぬ気の炎をぶつ放してはいたということにな

「ファンツ・・・・なるほどな・・・・」

「何故こんな事をした？お前の仲間がもしこんな目に遭つたら黙つてられないだろ？」「

「何がおかしい？」

「仲間？笑わせてくれる！コイツ等なんか私の手駒にすぎないんだよ！」

「なん……だと……」「

「こんな奴らなんか死んだって困らねーんだよ！」

お前・・・・

「それよりいいのかなあ？もう時間がないぞ！」

モニターにはパスワード解析に苦戦している佐久間と山本が映っていた。

「あと一分だ！」
すると孝平が、

すると孝平が、

「二人とも……逃げろ……。もう……間に合わない……」

「まだだーまだあと一分残つてゐー」

「そうだー絶対に救つてやるーお前と朱雀の友情のためにー」

「佐久間……山本……」

しかし、時間は無情にも過ぎていく……。
そして……遂に……、

「3……2……1……」

カチッ……。

「……」その時、俺の中で時が止まつたように思えた。
頭の中が真つ白になつた。

「あれ?……爆発……しない」

モニターの佐久間の声で俺は我に返つた。
校舎内からほどよめきが聞こえた。

「おい……どういふことだよあれ」

「まさか……」

綱吉さんはモニターを見ながら、

「どうやらあの爆弾は偽物だつたみたいだな」

するとITは笑い出した。

「お前・・・！」

綱姐ちゃんは拳を握り前に出なうとした。しかし、俺はそれを止めて、

そこでエリの笑いか止まつた。

「何が面白れーだよ！何が生きた感じしただよ！ぜんつぜん面白くも何ともねーよー」

「朱雀」

「お前本当にムカつくよ。」この世界では、小学生も中学生も・・・高校生も大学生も社会人もじつちゃんもばつちゃんも・・・みんな死ぬ気で生きてんだよー。」

「朱雀君」

「お前なんかに生きてると実感する資格なんかこれっぽっちもねーんだよー。」

「朱雀・・・」

「どうしてお前の仲間は今までお前についてきたと思つ? それはお前が大切だからだ。お前に忠誠を誓つて、お前を信じてついてきたんだろ?」

「アイツ・・・」

「そんな奴らの忠誠心踏みにじつて、死んでも困らねーとかいつてお前何なんだよ! フアミリーだろ! お前の“家族”だろ!」

「朱雀・・・」

「お前だけは・・・お前だけは死んでも許さねえ! ――」

すると、グローブが急に輝きだした。

「クツ! ――何だ!」

「来たか・・・」

「え? ・・・」

輝きが止むとそこには形状が変わったグローブがはめられていた。

「これは・・・」

「そり、それこそがお前の真の武器。『メエグローブ』だ!」

「これが・・・俺の真の武器・・・」

俺はグローブに炎を灯した。すると今までに無い力が溢れ出てきた。

『すうい・・・。心の底から力が溢れ出でくる。それに、今までよ
りしつくつするー。』

「さあ、決めてこい！ボンゴレ×エイ世！」

1

俺は速攻で突き込み、奴の懷にせり、一度潜り込んだ

切り腹に一撃を入れた。

奴の身体はぐの字に曲がりそのまま吹き飛んでいた。飛んでいた先では既に戦闘不能になつたエイの姿があつた。

「勝つた・・・」

「勝つた・・・」

「かつた。」

校舎内から割れんばかりの歓声が巻き起こった。
俺は空を仰いで、

「終わつた」

バタツ

「おこ朱雀君…」

「「朱雀…」」

俺はその場に倒れ込んだ…。

その後の事は俺は覚えていない。

しかし、孝平も山本達も無事で、俺は死んだよつに病院のベッドで寝ていたそうだった…。

天空鷹（ファルコンティチヨーリ）（後書き）

戦闘中に武器のバージョンアップ・・・なんかすごい事しちゃいました・・・。

終わつたれから（前書き）

第10話

更新が少し空きました。すみません（――）
どうぞご覧ください。

終わつとそれから

目を覚ますと俺は病院のベッドにいた。

そこには佐久間、山本、黒野、綱吉さんがいた。

「おー目覚めたか

「……」

「病院だよ。あの後、お前は倒れて運ばれたんだ

「え？ ですか……」

すると俺は思い出したかのように、

「さうだークロケッサフアミニーの奴らはーイッテツーー

「おーおー、無茶すんな。安心しろ。ボンゴレの人達が連行していつたよ

「みんなはー

「問題ないわよ

入り口には夏希お嬢様がいた。

「お嬢様で良いわよ。みんな知ってるし

「お嬢様……夏希さん……」

「そうですか・・・」

「で、みんなのことだけど、職員の人達と上茂君のおかげでみんな無事よ。孝平君もあばら骨数本折る程度で命に別状は無いつて」

「そうですか・・・。良かった・・・」

そこに一人の男子生徒が入つて來た。

「・・・お前が上茂 涼介か・・・」

「ああ」

「おそらく属性は・・・雷だろう」

「よく分かつたね」

「まああの中にいたのは雷属性の人だけだつたからな。ただし、普通のランクの炎ではまず破られる。つまり、ランク上位のB～Aオーバーに絞られる。ただし、の中に生徒はお前だけだつた」
「素晴らしい推理力だ。驚いたよ。さすがは少ない証言の中、若林辰夫を殺人した犯人を割り出しだけはあるね」

「何故それを？」

「風の噂かな」

そこに綱吉さんが割つて入つて、

「ハア・・・。まあいい。それより涼介、お前はその・・・ボンゴ

レ・・・なのか?」

「はー」

「ふう、ならよかつた」

「何故ですか?」

「あれほどの防御壁を造れる程の純度の高い炎はランボ以来見てないからな。他の奴らにやるなんて勿体無い」

『確かに、あれほどの防御壁を造れるなりひの守つの要にならぬかなめ』

「まあ何にせよひよしくな涼介」

「ああ、ひよしくなー。」

こうして新たな仲間、雷の守護者、上茂 涼介が加わった。

～～～～～～医者が来て後二日すれば退院出来ると話を聞いた時はみんな安心しきつた顔でいた。

その後みんなは孝平の方を見てくると言つて綱吉さん以外は部屋を後にした。

「あの中によく気がついたな。銃弾が全部死ぬ氣の炎だったのに」

「やう言つていて綱吉さんとはとっくに死んでしまったよね」

「あ・・・・バレた?」

「はー」

「そういえば、朱雀君は孝平君の爆弾が偽物だつて気づいたみたいだね」

「分かつてたんですか？」

「まあね。やつぱり超直感で感じたのか？」

「いえ、アイツの目を見て判断しました」

「目？」

「はい。アイツ話している時に視線が右上を向いたんです。あれは、人が嘘をつくときに起こる仕草のうちの一つなんです（本当）」

「しかしそれだけでは・・・」

「ええ。確かにそれだけでは判断は難しいです。しかし、最後の決め手となつたのは、アイツの戦い方でした」

「戦い方？」

「俺と綱吉さんで連携をとつた時、実は近くに他の仲間がいたんです。普通、仲間を手駒扱いする奴ならその仲間を盾にしたはずです。それが無かつたということは、仲間を大切に思つていた証拠。人を殺すなんてあり得ません」

「なるほどね・・・」

綱吉さんは少し笑みを浮かべ、

「やつぱり君を選んで良かった

「え？」

「敵を殺めず、友人、仲間のためならすべてをいとわない。そしてあの時、この力をみんなを守る為に使いたいって言つ答えも本物だ」

「やっぱりあの空間に綱吉さんもいたんですね」

「ああ。一世も言つてたよ『アイツは俺やX世に似てしる』って『しかし、歴代のボスの中でも類を見ないタイプだ』って」

「違つタイプ？」

「俺も聞いて驚いたよ。朱雀君、キミには……」
綱吉さんは俺の顔を見て、

「キミには大空以外の波動も流れている」

「えー？」

この時、俺は「大空以外の波動」を持つているなんてもちろん知らなかつたし、ましてやこの事実により俺の新たな武器が誕生するなんて知るよしも無かつた……。

終わつとそれから（後書き）

朱雀の新たな可能性が広がりました！

話は変わり、寒いですね。自分はストーブも良いですが、やつぱりオコタに限ります！

クリスマスもしくは年明けくらいに番外編でも出でつかなと思つます。要望がありましたら感想に添えてお願ひします。

m (— —) m

晴のち書つ（前書き）

第11話

更新が空いてしまいましたm(ーー)m
かつ、内容もグダグダです。内容はタイトルでまあ勘のよろしい方
は分かると思います。
どうぞご覧ください。

クロケツサフアミローとの戦闘から一週間がたち、並盛に再び平穏な日々が帰ってきた。

俺も退院以降、夏希お嬢様の執事として仕事を再開している。いつものようにお嬢様と登校していると。

「ねえ、朱雀。あなた身体は大丈夫なの？」

「ええ。山本の雨」テのおかげでだいぶ痛みも和らぎました」

そう俺は退院以降、山本の持っている雨の鎮静の効果を利用し、痛みを軽減している。

「晴の守護者がいればいいんだけどね～」

「そうですね～」

そんな感じで話していくと、

「よつー朱雀と夏希ー！」

「山本。おはよ

「おはよ。山本君」

「良い知らせだ！晴の守護者が見つかった！」

「本当かー！」

「ああ、俺の先輩でAランクオーバーの晴の人がいたんだ」

「そつか。んじやあ昼休みくらこに会いに行こ」

そんな感じで学校に登校していった。
・・・。

「なあ、山本。本当にいいのか?」

「ああ、そのはずなんだけど・・・」

それにしてもすごい視線だ。まあ、あの戦いの後なら当然か・・・・・。
ハウ・・・・また面倒な事しちまつたなあ。

「あつ！先輩遅かつたじやないですか！」

「いやーすまん、すまん。校庭で蛇と格闘していたら長びいてしまった」

校庭で蛇と格闘!? 何やつてんのこの人!

「お兄ちゃん！」

「え？」

「え？」

「え？」

「おー夏希ー、どうした？」

「どうしたじやなー。お兄ちゃん晴の守護者だったの？」

「あー、言つてなかつたっけ？」

「言つてなー。」

「えーっと・・・お嬢様。まず落ち着いて・・・」

「これが落ち着いていられるかつーのー。」

するとお嬢様のお兄さんは俺を見て、

「おーーお前が高峰 朱雀か！噂はかねがね聞いているぞー。」

「え、ああ。どうせ」

「無視するなー。」

「俺は池沢 了平。よひこへー。」

「はー。じやうけん」

俺は握手を交わすと、

「先輩はボクシング部主将で、全国大会で優勝した実績があるんだ」

マジかよ・・・すげえ・・・。

「いいや、俺はまだまだ弱い！誰かを守れなければ本当の強さとは言わない！」

「ちなみに先輩は人生で一度も喧嘩はしたことがないんだ

へえ・・・。意外だな・・・。

「当たり前だ！この拳は人を傷つける為にあるんじゃない！仲間や自分に迫る困難や逆境を打ち碎く為にある！」

『仲間や自分に迫る困難や・・・逆境・・・それを打ち碎く為にあ
る・・・』

「またに晴の守護者にひりつけだな」

「綱吉さん！」

「ここじゃ場所が悪い。屋上に行こう

「あ、はい」

「・・・」

「では、話の続きをこいつ・・・つと聞いていたいところだが・・・

？？

「おーい、早く出でーこよー。」

屋上入り口から出でてきたのは、一人の男子生徒だった。その格好は黒ズボンにワイシャツ、ベストを着た感じである。

「群れるのは嫌いなんだけど・・・」

「ハア・・・。相変わらず雲雀さんそつくりだな」

『あれ? あの人は確か風紀委員の・・・』

「えっと紹介しよう。コイツがお前たちの雲の守護者。雲雀 ひばり 雄也 ゆうや だ」

「雲の・・・守護者・・・」

「俺はコイツが最も適任だと思つ」「何故?」

「さつきの池沢も同じよう、晴の守護者の使命に合つてこの

「晴の守護者の使命。それは・・・ファミリーを襲う逆境を白い肉体で碎き、明るく照らす日輪

「使命?」

「ファミリーを襲う逆境を・・・」

「白い肉体で碎き・・・」

「明るく照らす日輪・・・」

「確かに適任ですね・・・」

「そう、感傷に浸つていると、

「ねえ、帰つていい?」

「だから待つてなつて。ハア・・・。んで、雲の守護者の使命は・・・」

「何ものこもとらわれことなく独自の立場からファミリーを守護する孤高の浮き雲」

「なんだ朱雀君、知つてたのか?」

「ええ。まあ」

俺は続けて、

「嵐の使命、それは常に攻撃の核となり休むことのない怒涛の嵐。雨は、戦いを清算し、すべてを洗い流す鎮魂歌の雨。雷は、ファミリーへの攻撃を一手に引き受け激しい一撃を秘めた雷撃」

「随分と詳しいな

「昔、親父に教えてもらつたんだ

「親父さんつて高嶺 玄武か?」

たかみねげんむ

「知つてるんですか?」

「ああ。今でもアイツと色々やりとりしてるよ。とは言つてもアイツは世界中を飛び回つていて何処にいるのか検討もつかないけどな

「そり・・・ですか

「安心しろ。アイツはそつ簡単に死なないよ。」
「は、はあ・・・」

「そんなことよつまづは守護者だな

「残すは霧か・・・」

俺は空を見ながら、

『霧の使命それは・・・無いものを在るものとし在るもの無いものとする』ことで敵を惑わしファミリーの実体をつかませないまやかしの幻影・・・。となるとやはり術士か・・・それも相当な実力を持つ』

「どうせこじろ搜すのは難儀だな・・・

俺は小声で空にさう呟いた・・・。

『だが・・・必ず見つけ出せるー

屋上には心地よい風が吹き抜けていった・・・。

晴のち書き（後書き）

終盤は守護者の使命について書いていました。

年明けに向かっての番外編も頑張って書きたいと思います。

クリスマス企画ー幻影のイルミネーション（前書き）

第12話

更新が空いてしまいました。

今回は番外編クリスマスバージョンです！（クリスマスが過ぎてしましましたが・・・）

どうぞご覧ください！

クリスマス企画ー幻影のイルミネーション

季節は過ぎて冬になつた。学校に来る人はみんな揃つて首を引っ込めて歩いている。

「なんだかシユールな光景だな」

「ああ。当たり前のよつな光景だけど」

俺と山本は教室の窓からそんな光景眺めていた。

「もう、12月か・・・」

「はえ～もんだな～」

そんな感じで窓越しで黄昏たそがれていた。

～～～～～～～～

学校も終わり、今はお嬢様と寮の部屋にいる。

「はあ～。つつかれた～」

「お疲れ様です。お嬢様」

俺はテーブルにホットココアを用意した。

お嬢様はただ、「ありがとうございます」と言い、一口飲んだ。

「もう、12月か～」

「早いもので」「ぞこますね～」

そんな感じでぼつぼつしていると、突然お嬢様は何か思い出したかのようだ。

「ねえ、朱雀」

「何でしょ、」

「あなた何か欲しい物ある？」

「どうしたのですか急に？」

「いいから」

「うーん……今のところはまだござりません」

「もう……じやあ考えておいて」

「はあ……」

その後俺は仕事を済ませ、床についた。

『それにしても、お嬢様があんな事言つなんて……何か予定あつたつけ？まあいいか……』

そして俺は口を閉じた……。

＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼翌日、綱吉さんから霧の守護者が見つかつたという報告を受け、学校から離れた所にある黒曜ヘルシーランドとこう所を訪れた。

「本当に」んな所にいんのか？」

佐久間がそうぼやくのも無理はない。この黒曜ヘルシーランドは外見も内面も誰が見ても廃墟としか見えないからだ。

「で、涼介」

「な、なんだ！」

「なんだじやねーよ。早く離れろ」

「いやだつてこえーだろー。」

もう涼介は半泣きの状態だ。

「ハア・・・。大の男が泣くなよ情けねー」

俺は軽くツツヨミを入れると、広い部屋に着いた。

そこには、ソファーに座っている一人の男がいた。

その場から逃げようとした涼介を佐久間と山本が首根っこを掴んで捕まえる。

「お前が霧の守護者。御堂 ハイジだな

俺がそう訪ねると、ハイジは、

「フフフッ。その呼ばれ方はあまり好きではありませんね。私はマフィアと馴れ合つもりはありませんからね」

いやマフィアじゃないから。自警團だから一応。「じゃあ聞くけど、なんでボンゴレなんかに」

「あなたが欲しいからです」

「えつ！？何！？お前まさか・・・」

俺は若干引いた。

「言つておきますが、私はそういう趣味は全くありませんからね」

栄一はため息をつくと、

「まあ、良いでしょ。では、あなたの実力を見せていただきましょうか！」

栄一は三叉槍を地面に付けた。すると朱雀の周りに何人もの分身が存在した。

「！」の中から私を見つけられたらあなたの勝ちとしましょう

「なつ！何だよこれ！？」

「ハア・・・・。まずは落ち着け涼介。それより・・・」

俺は再び栄一の方を見て、

「いいのか? こんなんで?」

「もつと数が欲しいと?」

「まあそんなとこかな」

「いいでしょ

「う

すると分身はさらに増えた。

「よし。そんじゃ・・・

俺は黒野から貰った死ぬ氣丸を飲んだ。

ボウツ。

「始めようか

俺は周りを見渡した。

「・・・・・・

そして目を閉じた。

「・・・・・フウ

すると額の炎がノックイングするように不規則に瞬きだした。

『何でしちゃうか？あの炎は？』

「……」のまま待つているのも退屈です。こちらから仕掛けても構いませんか？』

だが、朱雀からの「反応がない。

「では参りましょうか！」

分身のうちの五体ほどが正面から突っ込んできた。すると朱雀は手を前に出し、先頭に突っ込んできた分身に触れて、

「死ぬ氣の零地点突破初代エディション！」

すると突っ込んできた分身は皆、氷付けになった。

「何つ！」

「あれは……」

「死ぬ氣の零地点突破初代エディション！」

「いつの間にあんな技を！」

これに関しては少々時間をさかのぼる必要がある……。

（・）（・）（・）（・）（・）

「死ぬ氣の零地点突破ですか？」

「ああ。これからのことを考えると遅かれ早かれ教えることになる」

「なら、早いうちに教えたほうがいいってことですか？」

「そうこと。まあ、教えると言つても初代が使つていた方だけどな」

「初代が使つていた？」

「まあ、お前の零地点突破は自分で考えるしかない。だが、完成すれば歴代のボス並、いや、それ以上の力になる」

「自分で答えを導くしかない・・・」

「よし、それじゃあ始めるか」

「はい」

「・・・・・・・・・・・・・・」『不思議だ身体が軽い・・・』

俺は次々と向かって来る分身を初代エディションで凍らすなりした。

『クツー・どうなつているー』

『どうした。こんなものか』

『クツー・なめるなー』

すると分身は一つに集まりだし、

「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」」

「一体の巨人が現れた。」

「あれは…」

「フハハハハ…さあどうしますか？」

「…・・・・・」

「フフフ。驚いて声も出ませんか」

「いや、逆だ」

？？？

「ゾクゾクしてきた」

その言葉と同時に巨人からの一撃が来た。
しかし、俺はその一撃をかわし、

「いくぞ」

俺は右手を前に出し、

「いくぞ、イーザス形態変化」カンピオフォルマ

形態変化したイーザスは俺の背中にブースターとなつて姿を現した。
そこには一本の刀がクロスになつて収まつていた。

「一気にケリをつけるぞ…」

俺は刀を抜き突っ込んだ。

『人もどどめと言わんばかりの一撃で受けて立た

「いぐぞー！『X初代エディションー』」
クロスアース

するとブースターは翼となり炎を吹き出し、加速した。

巨人の身体に十字の傷が刻まれた。

「無駄だ・・・」

すると十字の傷から巨人の身体が凍り始めた。

「ゴツ・・・オオ・・・オオオオ・・・」

巨人は最後には全身氷付けになつた。俺は刀を一本氷付けになつた
巨人に投げ、刺さるとたちまち砕け、細かくバラバラになつた。

「チエックメイト……お前の負けだ」

「クッ・・・」

俺の額の炎が消え、

「さあ。約束通り頼みを聞いてもらひにがい」

榮一も觀念したのか、

「フフフツ。仕方ありませんね。いいでしょう」
そして俺が言つたのは・・・。

俺はお嬢様と部屋にいた。

「お嬢様。少し付き合つて欲しいことがあるのですがよろしいでしょつか?」

「あいつたのよ懲示？」

お願いします」と、少しでも見てもらいたい物があるのです

「…分かってたね。でも、それは何なの?」

「はい。それは…」
数分後…。

「で、何でこんな時間に並高に来なきやいけないのよ」

「まあまあお嬢様、しばりくお待ちください」

するとい

「おお、朱雀、夏希！」

「よお、山本、佐久間、

「早かつたな」

「いや。今来たといい」

「おおー！お前たちもう来ていたのか！」

「お兄ちゃんー！」

「ああ、お兄さん。それに雲雀さんも」

「何する氣だ？」「高嶺 朱雀。変なことしたらただじゃおかないよ」

「大丈夫ですよ雲雀さん。つと、そろそろかな」「何をする氣なんだ？」「高嶺？」

「まあ見ててください」

俺は懐中時計を見ながら、

「5・4・3・2・1」

すると並高はイルミネーションと共に輝きました。

「…………うわあああああああ…………」

「ワオ……」

「凄いな……」

皆が喜んでいる中、

「サンキューな、栄ー！」

「まったく、頼みどこののはいつの事でしたか。もつと大きな

な」とかと思いました

そう、今俺たちが見ている景色は「一の部下たちが作り上げた幻覚のイルミネーションである。

「あなたは相変わらず甘いですね」

「いいんだよこれで」

そう、これでいいんだ。

「お嬢様。私、今まで隠していた欲しいものを今ここで言わせてもらいます。とは言つてももう手に入れているんですけどね」

「何それ?」

「それは・・・」

俺はイルミネーションを見ながら、

「お嬢様も含め、ここにいるみんなの笑顔で」やがてこもる

「えつ・・・」

「私はこの笑顔をずっと見てみたい。何年経っても変わることのないこの笑顔を私は守っていきたい。そう思っています」

すると、雪が降り出した。

「榮一。これもお前がやったのか?」

「いいえ。これは本物の雪ですよ

「ハハツ。これこそホワイトクリスマスだな」

すると校舎にある文が浮かび上がった。その文は、

『G i v r o e t e r n a a m i c i z i a . . . □

「何だあの文?」

「『『永久の友情を誓つ』って意味だよ」

実はこれも俺が栄二に頼んだことだった。

「これからも俺はみんなと一緒にこの笑顔を守つていきたい。みんなに笑つてほしい。そんな願いがあるんだ」

「ハハツ。お前らしいな」

「まつたくだ」

俺たちはこの日、忘れられない思い出が一つ胸に刻まれた・・・。

聖夜の夜と雪と共に・・・。

クリスマス企画ー幻影のイルミネーション（後書き）

年越しまであと2日を切りました。

今年はとても大変な年でしたが、しかあああああああああし…！

…！…！

来年も死ぬ気で頑張つていきましょ！…！…！…！…！

日本を元氣にするために…！…！…！…！

皆さんの2012年に幸あれ！…！…！…！

真実は霧の中だらけである（一）（前編）

第13話

今回は久しぶりに謎説をやります。

真実は霧の中で「わざわざ」ます（一）

クリスマスも終わり、年を越した頃、お嬢様の携帯に一本の電話がかかつてきた。

「やあ池沢君」

「おはようございます。風祭警部

やつぱりあの人か・・・

「ござなりすまないが事件だ。場所は、並盛二丁目33番地だ

「分かりました。すぐ向かいます」

「え。

「朱雀。ちよつと出かけてくるわ」

「あの、お嬢様」

「大丈夫よ。ついてこなくていいわ。場所は分かるから

「いえ、そういうことではなくて」

「行つてきまーす」

ガチャーン・・・。

「行つて・・・らつしゃ いませ」

「うううううううう 「んあーーー分つかんないーーー」

「どうやらお嬢様は今田の事件に相当お咎みの「」様子ですね」

「ええ。ってあなたやつぱり来てたの?」

「はい。少し引っかかる事があつたので」

「引っかかる事?」

「そんなことよりお嬢様。事件の内容をお話してくれませんか?」

『無視か!ハア ・・・』

「分かつたわ。よく聞きなさい」

「・・・」死亡していたのは、大嶺 孝治^{おおみねいり}31歳。死因はナイフで心臓を刺されたことによる失血死。

第一発見者は妻の大嶺 恵子^{おおみねこ}。朝食だからなつてもリビングに来ないのを不審に思い、呼びにいつたらすでに死んでいた孝治さんを発見して通報したってわけ。

『大嶺 孝治と言いますとマジシャンで有名な』

『そりゃ、マジシャンの家庭で生まれた孝治は両親をなくした後、跡取りの最有力候補として名を馳せていたわ』

で、その後集められたのは妻の恵子と次男の荒井繁信、三男の大嶺恭平、繁信の妻、荒井千夏、そして孝治の一人娘、大嶺由香の5人よ。

「皆さん、ここに集められた理由は知っていますね」

「は、はい」

「では、あなた方は昨日の午後9時ごろ何をしていましたか？」

「そこで初めに答えたのは 恵子さんで、

「私は昨日の午後9時からは娘に勉強を教えていました。ここにいる繁信君と一緒に」

「それは本当ですか？繁信さん、由香さん」

「はい。確かに僕は恵子さんと一緒に由香ちゃんに勉強を教えていました」

「はい・・・本当です」

『お嬢様。この時の由香さんの様子は？』

『どうかぎりちない感じだったわ。まあ無理もないわ。実の父親が殺されたんだから』

で、その後答えたのは荒井 恭平とその妻、千夏で、

「俺は自分の部屋で読書してたよ

「私は主人の部屋で先に寝ていました」

「そうですか・・・」

『その頃私は大嶺家の臨時の掃除係として潜入していました』

『バレなかつたわよね?』

『ええ。大丈夫でした』

『なら良かつたわ』

次に現場となつた孝治さんの部屋に行つたんだけど、孝治さんは胸を刺されて椅子に座つて死んでいたわ。近くには折れて血の付いた短刀が落ちていたわ。

で、しばらくまた捜査して今日は終わつたつてわけ。

『その間私は掃除のフリをして家の中を捜査していました』

『あなた大丈夫だったの?』

『ええ。家の中もとてもきれいだったので、掃除する場所があまり。。。その後私は手伝いのお礼をと言わされて、大嶺家の皆様のマジックを見ることができました』

『へへ・・・』

『繁信さんの写真を利用したマジック。恭平さんのコインを消すマジック。千夏さんのトランプマジック。どれも素晴らしいものでし

た』

「ん～・・・。私の捜査を含め、犯人の田星はつきましたがまだ決定的な証拠がまだありません」

「決定的な証拠？」

「これがなければ問い合わせても、しらばっくれられて終わりでござります」

「じゃあどうしたら・・・」

「お嬢様。明日また捜査はいりますか？」

「ええ」

「では、そこに私も贊同してもよろしいでしょうか？」

「はあー? んな事出来るわけないでしょー!」

「わつわつと思つませして・・・」

俺は服の裏ポケットから一冊の手帳を取り出した。

「作つてきました。警察手帳（偽装）」

「えええーーー!」

「お嬢様。声のトーンがサ
ンスで、お嬢様の匂いが
Hさんで出でてくるのです
オさんみたくなつてますよ」

「そんな事はどうでもいいわー！ やうか、 そんなもの作っちゃま
いでしょー。」

「ついでに明日もう一人来ますから」

翌日、大嶺家。・・・。

「で、来たもう一人つて……」

「フフフツ。實に興味深いお話だつたので来てしましたＺＥ

L

「いや栄一君。最後のNE つていきなりキヤラ変えてくるのやめてよね。読者が混乱するから『えつ！？何！？』ハイツにきなりハイテンションになっちゃつて！Angel Beats! のT になつちやつたの！ねえ！どうなの！』ってなるから」「

『いや、お嬢様。そこまでいきませんよ。いくら読者でも』

俺が内心突っ込んでいると、栄一は

OK! Don't stop dancing.

「榮一」。嬉しいのは分かつたから黙つてくれる・・・stop
the Dancingで

「面倒ない……」

「…………その後、俺と栄一、お嬢様で一手上に別れて捜査した。

「孝治氏の部屋へ

俺と栄一は部屋の中をくまなく捜索した。

そして、鑑識の人に昨日回収した折れた短刀を見してもらつた。

「どう思つ? 栄一」

「やはりあなたの読み通りですね」

「これでハッキリしたな」

すると孝治氏の机の引き出しからあるものを発見した。

「これは……手紙?」

「そのようですね」

そこに書いてあつた内容は……。

「これは……」

「同時刻、リビングへ

私は昨日から引き続き事情聴取をしていた。

しかし得るものは昨日となんら変わらないもので終わった……。

（孝治氏の部屋）

捜査も切り上げようと思いつつ、部屋を出ようとしたら、

ガチャ

「あ……」

「君は……」

そこにいたのは孝治氏の一人娘、大嶺 由香さんだった。

「あつ、『めんなさい！捜査の邪魔でしたね』

「いえ、ちようど終わった頃なので、何か『用でしょうか？』

「ちよつと中を見てもいいですか？」

「えつ……」

「ダメ……ですか？」

と、上目遣いで言つてきた。

俺は少し迷つたが、

「ええ。いいですよ少しなひ」

「ありがとウイザードさま」

「ですが、私はあなたの見張りとしてこれでいいますが、よろしいですか？」

「はい。構いません。どうぞ自由に中を見ていてください」

そんな感じで俺は栄一を他に行かせ、由香さんの見張りをした。何もしないでいるのも暇なので、

「それにしても、本がたくさんありますね」

「はい。お父さんはマジックも好きでしたが本もこよなく愛していました。いつも小さい頃寝る前に本を読んでくれたのをよく覚えています」

『マジシャンでもあり愛読家・・・。そして、娘には毎晩本を読んであげていた・・・。いい父親だつたんだな・・・』

「いいお父さんですね」

「とにかくも義理ですけどね。私、生まれてすぐ両親を「へしてこの家に引き取られたんです」

「そう・・・でしたか・・・。なんかすみません。聞いたらいい」と聞いたみたいで

「いえ、そんなことあつません」

そのまま沈黙が続いた。

『まざい・・・何か話さないと』

「あの・・・」

「は、はい」

「お願いがあります。犯人を・・・犯人を見つけてくださいーお願
いします！」

そこにあつたのは、由香さんの必死に助けを求めるがあつた。
俺はふつと笑みを浮かべ、彼女の頭をなでた。

「安心してください。犯人ははもう突きとめております。そしてそ
れが誰なのかはあなたも知つていいはずです」

「え?・・・」

俺はそつと手を差し伸べ、

「わあ。参りましょひ」

俺は由香さんと共に、この事件のケリをつけるために歩き出した・
・。

うへん。

オリジナルの事件はやはり難しいですね～。

第14話

今回まことに長くなりすがました。

それでは謎解き後半戦スタートです！

真実は霧の中だ」わざわざ（2）

リビングにはすでに栄一がお嬢様を含め、大嶺家の全員を集めていた。

「集まりましたね」

「あの、どうゆうとですか？」
「…」

次男、繁信が尋ねてきた。

俺は変装に使っていたダテ眼鏡を中指で持ち上げながら、言った。
「皆さんに誰が犯人なのか？」
申し上げるためです

「…え…？」

そこでは栄一以外の人間が驚いていた。

「だ、誰なんですか？その人は」

「今ここで言つことはできますが、それではしばらくおられられて終
わりになってしまつのであります、事件の真相を先にお話しします」

「は、はい」

「まず、孝治氏は自分の部屋で椅子に座つて死んでいた。そして凶
器となつた短刀は折れてカーペットの上に落ちていて、部屋は密室
であった。ここまではよろしいですか」

「はい・・・」

「一〇〇で私は疑問に思いました。まず一つ目は孝治氏はなぜ抵抗もせず、殺されたのか? 二つ目は押収された折れた短刀について。この二つでござります」

俺は続けて、

「まず一つ目の疑問なぜ抵抗もせず殺されたのかについては普通なら誰だって殺されそうになつたら誰しも抵抗するのは当たり前でございます。それが無かつたということは、いきなり目の前に短刀が現れたとしか言えません」

「犯人がドアからこいつそり入つてきたってゆう可能性は?」

俺はお嬢様の質問にこう答えた。

「失礼ながらお嬢様。お嬢様は部屋で一体何を見てきたのですか? そのような質問が出てきたとき私は危うく爆笑のツボにハマるとこでしたがないいちいち笑うとキリがないので説明に戻ります」

「なつ!」

「孝治氏の机は扉の向かい側。どんな人でも普通なら気づきます」

そこで恭平が

「じゃあ犯人は幻覚でも使つたと言つんですか?」

「そう、犯人は幻覚を使って孝治氏を殺害したんです」

「でもどうやって？」

「簡単です。幻覚で短刀を作り上げ、それを飛ばして孝治氏を殺しました。それだけで「ござります」

「でも、幻覚ってゆう証拠は？」

「これドジョウります」

「これは・・・」

「押収された折れた短刀です。」「この刃の疑問のこの短刀ですが、この短刀にはいくつか不可解な点があります」

「不可解な点？」

「ここからは栄一に説明を託した。

「それは私が説明しましょう。まず、一つ目は現場にあつた短刀とこの短刀が別物だとゆう点です。現場にあつた短刀は真ん中あたりが折れていて破片が散らばっていました。しかしこの短刀は真ん中は折れていますが破片が一つもありません」

「取り忘れたんじゃないのか？」

「私たちもそう思い、先ほどまで捜索しましたが昨日も含め、そんなものはありませんでした。その証拠に・・・」

栄一は手袋で折れた短刀を取り出し、折れた場所を合わせた。

「このように、破片を埋める場所などありません。つまり、この短刀は本物でも、現場にあつた短刀は幻覚だということです」「ござります」

するとお嬢様は、

「その根拠は？」

「これです」

俺は一枚の写真を見せた。

「これは？」

「鑑識が撮った現場にあつた短刀でござります」

そこには、折れた短刀と立てかけてある鏡が端に映っていた。

「お嬢様。」の鏡をよくご覧ください」

「え？」の鏡を？」

夏希はその部分をじ～っと見つめた。そして気づいた。その「不可解な点」に。

「短刀が映つてない！？」

「はい。私もなぜこのような写真があつたのか疑問に思いました。しかしその答えはすぐでました」

「何よ？」

「これです」

俺は一枚の手鏡を取り出した。

「「」の手鏡が」の仮説を確信に変えたのです

「「」の手鏡が？」

「これは『真実の手鏡』とこうボンゴレの家宝のうちの一つだ」を
います。」のよつこに本物を映しても普通の鏡ですが、幻覚など物を
映すと……」

俺は手に持っていたリングゴを鏡に映したすると、やけに映つたのは
リングゴではなく、丸めた紙くずだつた。

「あつー。」

「「」のよつこ本来の姿を映し出します

ポイッ。

「つまり、現場にあつた短刀は偽物とゆうことになるのです

「でも、何の為に？」

「おやべりべ、幻覚が長く保たないと思つたからでしょ。途中で消
えてしまつたら、元も子もないですからね」

「じゃあ、短刀を飛ばしたつてのは？」

「孝治氏の部屋に意識を飛ばして短刀を作り上げたので」そこまでは

「そんな事出来るの？」

「少なくとも、中の上くらいの術士なら可能でござります。そしてそれが出来るのはただ一人……」

俺は家族に視線を変え、指差した。

「恭平さん。あなたですね」

「なつーちよつと待てよー。ビーツして俺なんだよー。」

「あなたは私にコインが消えるマジックを見せてくれました。その時、私は見たのです。いや、正確には『感じた』と言つ方が正しいですかね」

「感じた？」

「霧属性の炎を・・・ねつ

!!!

「それにあなたが今身につけていいるそのリング。それは霧属性のリングではありますか？」

「つー」

恭平は慌ててリングを隠した。

「やはつやつでしたか」

「なぜ俺だと分かつたんだ？作戦は完璧だつたはずだ」

「ええ。確かに完璧でした。一部を除いては」

「君に見せたマジックか・・・」

「はい。しかしながらゼリーのやつな事を」

恭平は少し黙り込んだ後、

「憎かつたんだ。兄さんが・・・」

「後継者についてですか？」

「そうだ！ 兄さんは長男とゆうだけで後継者の最有力候補になつた！ それが憎かつたんだ！」

「…分かりました。しかし、それはあなたの見当違いでござります。孝治氏は自分が後継者になることを望んでいませんでした」

恭平はリングに炎を灯した。

「なつ！」

「・・・やはつな

「どうこいつ事朱雀?」

「！」の家 자체が幻覚だとゆうことです

「そんな！」

「！」安心ぐだわこお嬢様。そのために『彼』がいるんです

俺はそいつに視線を移した。

「榮一ー！」

「分かっています」

榮一は三叉槍を地面につけた。すると今まで歪んでいた空間はしだいに元に戻った。

「なつー！」

「幻覚を幻覚で返されたところ」とは知覚のコントロール権を完全に剥奪されたことを意味することとは知っていますね

「くつ・・・」

「話を戻します。さつきも言いましたように、あなたの見物違いでいざれこます。その根拠は・・・」それで「やれこます」

俺は一通の手紙を差し出した。それは孝治氏の部屋で見つけたあの手紙だ。そこにほんのう書かれていた。

こんな形で気持ちを伝える」とをお許しください。

私は両親が亡くなつた後、この家の後継者となる予定ではいました。しかし、私はそんな後継者となる実力も素質も無いと思っています。ただ長男ということだけで後継者になるくらいなら、死んだ方がまだと思う程です。

そんな私より、三男の恭平が適任だと思います。確かに実力はまだまだかもしれませんのが彼はいつも私たち家族の事を考え、行動している事は理解して欲しい。

いつも眉間にシワを寄せ、祝る様子に拳を振る。ポン＝レ・世のようにはなって欲しい。私はそう思います。

大嶺孝

読み終えた恭平はただ黙っていた。

「最後の名前の最後の一文字が抜けているのは、その頃には孝治氏は既に亡くなっていたからです。しかし、それは恭平さんあなたが殺したからでもありますか、それだけではありません」

「えつ

「孝治氏は既に重い病を患つていたのです」

「そんなん・・・」

「孝治氏はそのことを家族に知らせず、一人で闘つていたのです。家族に心配と不安を与えないために」

「どうして……」

「愛する妻、娘、兄弟。そのすべてが彼には大切であり、守りたい
絆だったからで」
「やります。孝治氏は既に余命を悟り、このような
行動に出たので」
「やります」

「兄さん……」

恭平は涙を流しながら、

「兄さん……」
「めん……」

「その手紙はずっと持つていてください。これは孝治氏と家族を繋
ぐ大事な手紙ですから」

「……」
俺とお嬢様は栄一を見送り、帰ろうとした
その時、

「あの……」

扉から由香さんが俺たちを呼び止めた。

「じゃつ、私は先に帰るわ」

「えつーちよつとお嬢様!…」

そんな事も聞かずお嬢様はそそくわと帰つて行つてしまつた。

「つたぐ……」

「あの・・・」

振り返ると既に由香ちゃんは俺の田の前にいた。

「あの・・・今田はその・・・ありがとハジケてました!」

「う」し頬を赤くしながら言ひてきた。ちょっと、可愛いな・・・。

「いえ、私に出来る」とをしただけですよ」

「ハハハ。優しいんですね」

「ビ」がですか?」

「すべてです。お父さんの部屋にすんなり入れてくれたり、頼みを聞いてくれたり。普通ならあつませんよそんな事」

「そうでしょうか?」

「あなた、警察ではあつませんね」

ギクツ・・・。

「バレてましたか?」

「少なくとも私には。それにあなたがここに来るのもなんとなく分かっていました」

「なるほど・・・。さすがは予知能力を持つた巫女ですね」

シャーマン

「あなたも気づいてたんですね？」

「首に上げていねえのおしゃぶりを見れば分かります」

「では、今度は私が質問します。あなたは何者？」

「私はただの……」

俺はただ口元に笑みを浮かべ、

一 並高の生徒兼執事ですよ

二十九。

「では、またどうがで……」

朱雀はその場から立ち去ろうとした。

「たゞ一矢

朱雀はケルツと振り返り、

嬉しき時こそ 心から笑しなき」

そして、朱雀は今度こそ立ち去った。
それを壇の外で聞いていた夏希は、

「まったく・・・。罪な男ねあの子は・・・」

～・～・～・～・～・～～そして翌日

俺は昨日の疲れが溜まつていたせいか朝のHRは少しつらかった。
そんな中先生は、

『え～。今日は転校生を紹介する』

『転校生？こんな時期になぜ？まつ、誰でもいいか・・・』

『入りました』

そこに入ってきたのは、

『　　「おおつー」　　』

『可愛い・・・』

『タイプだわ俺・・・』

『つたぐ・・・。転校生で騒ぐなよ』

『転校生の・・・です』

俺はその転校生の名前を聞かず、ただ声からして女子だといつと
判断して机にうずくまつっていた。

『しかし、』の声。どこかで・・・』

『先生！俺の隣空いてまーす！』

『こるんだよな～。うでじゅばるヤツがクラスに一人、一人』

すると俺の隣で椅子を引く音が聞こえた。

『あれ？ああそっか・・・俺の隣も空席だつたな・・・』

すると、その転校生は、俺に小声で呟いてきた。

「久しぶりですね」

「ん？」

俺は眠そうな顔をゆっくりと上げた。

「えつ・・・」

そう、そこにいたのは・・・。

「また会えましたね」

「由香・・・さん・・・？」

「ん？どうした高嶺？知り合いか？」

「へ？ああ。ええ、まあ・・・」

その瞬間、クラスの（男子の）視線が（殺氣）俺に向いたのは言つまでもない・・・。

真実は霧の中だるむこもる（2）（後書き）

う、うん・・・。

フラグ初めて立ちましたね。(^ - ^) 。

それにしても、オリジナルの謎解きはやはり難しいですね～(^ - ^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3742y/>

謎解きはリボーンの後で・・・

2012年1月14日20時50分発行